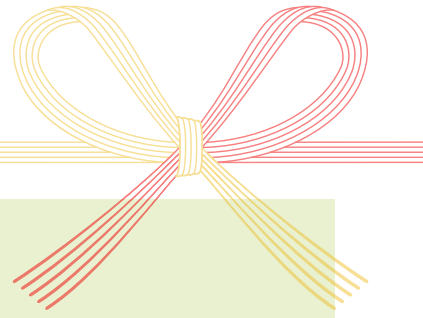


「贈答包み」の発祥と、金封様式



贈答の起源

日本古来の宗教である神道において、神前に供えた奉納品を包んだのが発祥で、神饌物(神様の食べ物)のお供えとしての農作物や魚介類を束ねるために、和紙で包み掛けた上から数本の白い紙紐りを束ねたもので丸結び(今でいう結切り)にする形で奉納されていたことに由来します。

現在の金封様式の元になったのは、鎌倉～室町時代の頃に、定められた宮中の儀式における礼法(各儀式の作法や奉納贈答様式)に起源があり、その礼法に定められた金品の包み方作法の一つである「金子包み」が原形となっています。

当時の「金子包み」は、硬貨であったことから中包みと外包みの二重包みにしたもので、水引の色は慶弔ともに同じ白い水引(一色)を用い、結び方も慶弔ともに同じ丸結び(今でいう結切り)と定められていました

現在の様式

江戸時代には武家社会にも慶弔の儀式が執り入れられるようになると、礼法も武家様式が編さんされて新しい贈答習慣が生まれますが、明治時代以降に庶民の間にも執り入れられるようになると簡素化が進んでいきます。それに伴って本体の二重包みが東西に分かれ、中包みの形状が関西折として西日本に、また外包みの多当折が東日本に定着するとともに、祝い折・弔い折に区別れていた折り方も祝い折に統一され、慶弔の用途分けは本体紙の左側の紙端の色や、結ぶ水引の色により区別するように変化していき現在に至っています。

折り方の種類

「**多当折**」(四方折り・四つ手)

「**関西折**」(風呂敷折・斜め折)の2種類があります。

向って左側の紙端に「赤色」の細幅線状の色が付いています。

元々は、東日本地区では多当折、西日本地区では関西折が使い分けられていましたが、現在では西日本地区でも多当折が用いられるようになってきています。



多当折



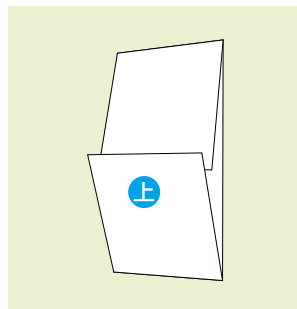
関西折

本体紙の折り重ね方

多当折りの金封やのし袋の内、上下の折り込みが裏面で交わる形式のものは、慶弔によって**重ねあわせる方向が異なります**ので注意が必要です。

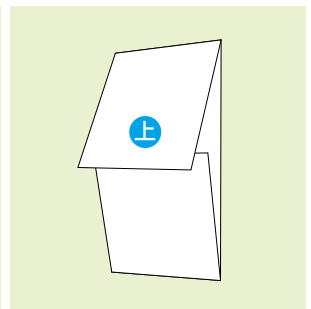
●祝い事／祝い重ね

「天を仰いで喜びを表す」との意から、裏面下部の折り返しの方を上になるように折り重ねます。



●弔い事／弔い重ね

「頭(こうべ)を垂れて悲しみを表す」との意から裏面上部の折り返しの方を上になるように折り重ねます。



お札を入れる向き

金封の中袋やのし袋にお札を入れる際、お札の方向に特別な決まりはありませんが、中袋を表から見てお札の**人物の顔が上**になる様に入れる事をおすすめしております。

葬儀・告別式の弔慰金は、受付の方が確認しやすいよう、逆に(向かって左側、和数字の金額、壹万円・五千元などが印刷されている方を上)に入れる場合もございます。

